

A | 世界の出版界との連携と協力

A-1 国際出版連合への参加と活動

❖ IPAへの加盟

国際出版連合(IPA)は、1896年(明治29)に設立された世界の出版界を代表する国際機関である。IPAの使命は各国の出版協会が相互に協力し、①出版の自由、②著作権の保護、③自由な出版流通などを実現していくことにある。

日本は、第二次世界大戦ののち、1951年(昭和26)のサンフランシスコ講和条約の締結によって国際社会に復帰したが、出版界においても国際社会の一員として国際団体に加盟すべきとの機運が高まり、書協は設立翌年の58年4月にIPAからの加盟勧奨を受諾し、正式に加盟を決定した。

現在では4年に1度開催(当時は3年に1回開催)されているIPA大会への日本の初参加は、62年の第16回バルセロナ大会であった。このとき、参加したのは、野間省一会長(講談社)、下中邦彦副会長(平凡社)ら4名であった。野間会長はこの年の書協総会で、大会参加に関連して「われわれの出版物、日本の出版物の欧米諸国への輸出、進出ということを強く考え、かつこれを具体化するように努力していくことが、これからのわれわれの任務ではないか」と述べている。

日本はその当時、出版点数では年間2万2000点と、すでに欧米の出版先進諸国⁷にも引けをとらない水準に達しており、日本のIPA加盟は国際出版界にとっても重要な出来事として受け止められた。その証拠に、日本からはすでに70年からIPAの常任理事会(Executive Committee)の一員に野間会長が選出されている。また、88年から95年には服部敏幸理事長(講談社)が、95年から2001年までは渡邊隆男理事長(二玄社)がそれぞれIPA 常任理事会メンバーとなり、さらにアジア地域担当副会長に就任している。その後、01年からは金原優副理事長(国際委員会担当・医学書院)が常任理事に就任した。金原副理事長は、07年1月にIPA副会長に就任した。

❖ IPA京都大会に43か国が参加

日本の出版界が国際的地位を高める機会を得たものとして、1976年(昭和51)5月の第20回IPA大会の日本開催があった。

5 — International Publishers Associationの略。《www.ipa-uie.org》

6 — International Federation of the Periodical Pressの略。《www.fipp.com》

7 — 同年のアメリカの新刊点数は2万1904点、イギリスは2万5079点。



第20回 IPA大会京都大会
(1976年5月、京都国際会議場)。

書協では、69年ごろから、IPA大会の日本開催についての議論が国際委員会を中心に行われており、70年には大会開催地として立候補を表明した。72年5月のIPAパリ大会で正式に日本開催が了承されると書協では、11月に国際出版連合大会準備委員会を立ちあげ、出版界あげての準備体制を整えた。75年1月には準備委員会を拡大改組し、53名の委員からなる「国際出版連合大会実行委員会」を発足させた。大会名誉総裁には三笠宮殿下が就任し、会長は野間省一書協会長、実行委員長は下中邦彦理事長が務めることとなった。大会開催の総費用としては、当初の予算案である1億5000万円では不足する見込みとなり、総額2億円強に修正された。収入内訳は会員各社・関係各社からの寄付約1億円、政府からの助成金4500万円、個々の参加者からの参加料7000万円であった。

IPA第20回大会は、76年5月25日から6月1日までの8日間、京都および東京で開催された。参加者は41か国から、同伴者も含めて1177名に及んだ。開会式は25日午前10時から挙行され、下中実行委員長の開会宣言に始まり、IPAブーン会長、永井道雄文部大臣、安嶋彌文化庁長官、ベアシュトック・ユネスコ代表の挨拶のあと、三笠宮殿下が「東西文化の交流について」と題する記念講演を行った。

会議は、25日の午後から29日の午前中まで(27日は奈良への日帰り旅行)の都合3日間、11の会議が行われ、29日の全体会議では各分科会などから16の勧告案が提案された。このうちの11が、同年9月のフランクフルトでのIPA総会(国際委員会)で正式に採択された。

会議資料は、事前に報告予定者から原稿の提出を受け、英・独・仏・日の4か国語

に翻訳をして、言語別にA5判、400ページの報告集としてまとめ、配布した⁸。IPA大会でもこのように会議資料を完備した大会は、それ以前にも以後にもなく、各国からの参加出版人の称賛を得ることができた。さらに、大会終了後には英・仏・日の3か国語で議事録を作成し、参加者に送付した。

京都での会議のあと、参加者は東京に移動し、取次会社・印刷所・書店・図書館の見学、能の鑑賞会など多彩な催しが行われた。とくに京都での催事にあたっては、関西支部の書協会員出版社が大きな役割を果たした。

◆その後のIPA大会

その後の各大会にも、書協は毎回多数の参加者を送っている。1980年(昭和55)のストックホルム大会には86名の多数が参加し、このとき初めて日本語同時通訳者が同行した。以来、IPA事務局ならびに主催国の出版協会の厚意によって、IPA公用語である英・独・仏・西の4か国語に加え、日本語の同時通訳ブースが無償で提供されている。これにより日本からの参加者は、日本から同行した同時通訳者の助けを借りて、国際出版界の最前線の論議を正確に理解することができている。

84年のメキシコ大会では、ソニーの盛田昭夫会長が基調講演者として招待され、同社が開発したCD-ROMを携え、これ1枚に百科事典が収載できると紹介し、世界の出版界に新しい時代の到来を強く意識させた。

88年のロンドン大会には総勢105名の大代表団で参加し、日本からのスピーカーも4名が電子出版、教科書出版、複写問題、出版流通などのテーマでそれぞれ報告を行った⁹。

インド・ニューデリーで開催された92年の大会は、76年の京都大会以来のアジア地域での開催となった。日本からは、植木浩・国立西洋美術館館長(前・文化庁長官)が、「日本の文化の発展と出版」について基調講演を行った。また、服部理事長は、「アジアの出版」分科会の座長を務めた。そのほか、出版研修、読書推進、電子出版、著作権と出版者、著作権の集中処理の各分科会で日本からのスピーカー5名が報告を行った。日本からは、総勢42名が参加した¹⁰。

96年のバルセロナ大会は、IPA設立100周年を祝う記念の大会であると同時に、前年の95年にユネスコが4月23日を「世界 本と著作権の日」に制定した第1回の大会でもあった。日本からは82名が参加したが、とくに日本でも85年から始まっていた

8 ———▶Web1 「国際出版連合第20回大会 報告ならびに議事録」(1976)

9 ———▶Web2 「IPAロンドン大会特集号」『書協』(平成元年1月)

10 ———▶Web3 「国際出版連合第24回ニューデリー大会報告特集号」『書協』(1992年5月)



第4回 IPA国際著作権シンポジウム(1998年1月、東京ビッグサイト国際会議場)。

「サン・ジョルディの日」の本場での開催ということもあり、日書連加盟の書店人も十数名が参加し、4月23日の「サン・ジョルディの日」の賑わいを肌で感じることができた。日本からのスピーカーは、児童書、アジアの出版、ニューメディアと本の将来といった全体会議および分科会に3名が参加したほか、全体会議「技術開発—電子ブックから情報ハイウェイまで」の議長を渡邊隆男理事長が務めた。同大会では、スペインのカルロス国王夫妻が開会式に出席し、IPA100周年に祝辞を述べた。また、閉会式には、厳戒態勢のなか、89年の『悪魔の詩』¹¹刊行以来、イスラム原理主義者による「死刑宣告」の対象となっていた著者サルマン・ラシュディ氏が出席し、出版の自由の大切さについて講演した¹²。

2000年のブエノスアイレス大会は、IPAの歴史のなかで初めて南米での開催となった。この大会では、電子出版についての報告がとくに注目された¹³。日本からの参加者は34名で、スピーカーは、子どもと若者のための読書、電子出版とオンデマンド出版、著者と出版者の権利、国際共同出版、海賊版と複製などの分科会に5名が報告を行った¹⁴。

04年の大会は、ベルリンで開催された。この大会では、会長選挙が行われ、第28代の会長として、アルゼンチン出身のアナ・マリア・カバネーリヤス氏が、南米出身としても女性としても初のIPA会長に就任した。

08年大会は韓国・ソウルで開催される予定で、16年ぶりにアジアでの開催となる。

◆ IPA国際著作権シンポジウム

IPAでは、1986年(昭和61)から大会開催の中間年に、国際著作権シンポジウムを開催している。第1回は、ベルヌ著作権条約締結100周年を記念してドイツ・ハイデルベルクで開催された。その後、90年にパリ、94年にはイタリア・トリノで開催され、98年の第4回がアジアで初めて、東京で開催されることとなった。

書協では96年12月に「IPA国際著作権シンポジウム委員会」が発足し、会長に渡邊隆男理事長、実行委員長に佐藤政次常任理事(オーム社)が就任し、開催準備を進めた。シンポジウムのプログラム作成は、国際出版者著作権協議会(IPCC¹⁵)が担当し、佐藤委員長および上野幹夫著作・出版権委員会委員長(東京布井出版)がこれに参加した。

日本側委員会では、顧問として、北川善太郎・京都大学名誉教授、齊藤博・筑波大学教授、長尾眞・京都大学教授、中山信弘・東京大学教授、半田正夫・青山学院大学教授が就任し、大会プログラム・運営などについての助言を行った。

シンポジウムは、98年1月22日から24日の3日間、東京ビッグサイト国際会議場において、「変容する市場における出版者」をメインテーマとして開催された。世界40か国・地域から332名(国内162名、海外146名、同伴者24名)という多数の参加者があった。開会式では三笠宮殿下の開会挨拶に続き、林田英樹文化庁長官らが挨拶、世界的所有権機関(WIPO¹⁶)よりミハリー・フィチョール事務局長補、さらにユネスコからミラグロス・デル・コラル著作権部長がスピーカーに立ち、華々しく開会した。プログラムは、基調講演および八つのセッションで構成され、基調講演は齊藤博教授およびW・フォン・ルシアスIPCC議長が行った¹⁷。

シンポジウム最終日には、「出版者の権利法制化に向けての書協の活動を支持する」との文言を含む四つの決議が採択された¹⁸。

交流行事として、歓迎レセプションを東京国立博物館で日本美術内覧会を併設して開催し、また23日のバンケットを八芳園で行った。開催費用としては、会員社からの運営協力金約2400万円、参加登録料約2000万円、書協特別事業積立金の取り崩し2000万円の計約6400万円で賄った。シンポジウム終了後、佐藤委員長のもと、すべてのセッションと決議を取めた議事録・論文集が編纂され、関係者に配布された。

11—— 1991年7月に同書の日本語翻訳を行った五十嵐一・筑波大学助教授が殺害されるという事件が起こった。イタリア、ノルウェー、トルコなどでも翻訳者が襲われる事件が続いた。

12—— ▶Web4 「IPA第25回大会報告書」(1996年)

13—— 2000年3月14日、インターネット上でスティーブン・キングの電子書籍『Riding the Bullet』が2ドル50セントで販売され、発売後48時間で50万部を売り上げたことが大きく取り上げられ、本格的な電子出版時代の到来と喧伝された。

14—— ▶Web5 「IPA第26回大会報告書」(2000年)

15—— International Publishers Council for Copyrightの略。

16—— World Intellectual Property Organizationの略。《www.wipo.int/》

17—— ▶Web6 「第4回IPA国際著作権シンポジウム プログラム」(1998年)

18—— ▶Web7 「第4回IPA国際著作権シンポジウム 決議」(1998年)

A-2 国際雑誌連合と雑誌に関する国際関係

❖国際舞台への進出

雑協は1966年(昭和41)8月、国際雑誌連合(FIPP)に加盟した。その年の初めにFIPP(当時の加盟国は25か国)の名誉議長が来日し、同連合への加入要請があり、これを受けて雑協は6月の理事会で加盟を決定した。

FIPPは1925年にフランス・パリで結成され、66年には本部をパリからロンドンに移し、現在では40の国・地域が加盟している。当初は国際交流、懇親の場という性格だったが、雑誌ジャーナリズムの「目」、「耳」としての役割を果たしつつ、主要な国際機関と協力・連携をはかりながら言論・報道の自由の擁護、雑誌の発展のための調査・研究を行っている。2年ごとに世界大会を開催しており、97年(平成9)にはアジアで初めての世界大会を東京で開いた。

雑協の代表団がFIPPの世界大会に初めて参加したのは、67年のベニス大会である。石川数雄理事長(主婦の友社)、鷺尾洋三編集委員長(文藝春秋)、鈴木良編集副委員長(誠文堂新光社)の3名が出席し、石川理事長は「日本の雑誌出版界の現状について」と題してドイツ語でスピーチを行い、鷺尾・鈴木両氏も「日本における報道の自由とプライバシー」「日本における著作権問題」をテーマに講演を行った。これ以後、雑協はFIPPの世界大会に代表団を派遣し、適宜、関連テーマについて講演・報告を行っている。

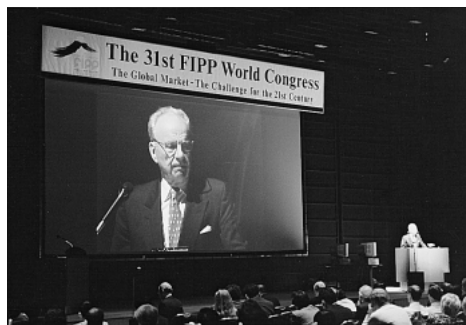
❖アジア初のFIPP東京大会「21世紀への挑戦」

1997年(平成9)5月、FIPPの第31回世界大会は東京で開催された。テーマは「グローバル・マーケット—21世紀への挑戦」、会期は5月13日から15日までで、メイン会場は完成したばかりの東京国際フォーラムであった。35か国2地域から714名(国内327名)が参加し、FIPP世界大会史上、最大規模の大会となった¹⁹。

大賀典雄・ソニー会長が「21世紀〈紙と活字〉への期待」と題して基調講演を行い、「メディア王」のルパート・マードック・ニューズコーポレーション会長も「21世紀のメディア世界地図」をテーマに講演するなど、雑誌出版界だけでなく内外のメディア界からも大きな注目を集め、その内容は高い評価を得た。

会議内容の充実ぶりとはもとより、レセプションをはじめ各種行事がきめ細かくプログラミングされ、参加者から「これまでの大会でもっとも印象に残る大会」といわれた。その一端を紹介すると、開会式での斎藤メモリアルオーケストラのミニコンサートで始まり、青島幸男・東京都知事主催のランチョンパーティーがあり、また、ガラパ

第31回FIPP世界大会東京大会
(1997年5月, 東京国際フォーラム)。
講演するルパート・マードック氏。



一ターには、日本相撲協会の協力によって、出羽海理事長はじめ貴乃花、曙の二横綱、武蔵丸、貴ノ浪の二大関が参加し、海外の出席者と同じテーブルで食事をとりながら交流を深めた。さらに、雑誌写真記者会が参加者のスナップ写真を撮影して宴会終了後に参加者に提供するなど、日本の雑誌出版界の創意工夫に、参加者は驚きと深い印象を残した。大会の報告書で、雑協の田中潤事務局長は、「東京大会はビッグストでベストに加え、まさにヒストリックであったことを確信する」と記している。

FIPP東京大会は、雑協の歩みのなかで最大の行事だった。日本での世界大会の開催機運は、91年のヘルシンキ大会(フィンランド)を契機に醸成されていき、93年のオーランド大会(アメリカ)に田中健五副理事長(のち理事長・FIPP会長・文藝春秋)が出席し、第31回世界大会の東京開催を宣言したのである。翌94年、雑協はFIPP東京大会準備委員会を立ちあげた。永田晨理事(のち同大会実行委員長・日経BP社)をFIPPマネージメントボードに委嘱、総務・プログラム・会議運営・広報・接遇・財務の準備委員会をスタートさせた。同年11月には、関係8社(電通・博報堂・大日本印刷・凸版印刷・トーハン・日販・日本製紙・新王子製紙)をクラブ関東に招いて、資金・運営について協力要請を行い、大会に向けた基盤整備を進めた。

◆東京大会から10年後に北京大会

1995年(平成7)9月、FIPPアムステルダム大会(オランダ)には日本から88名が東京大会の招致活動のために参加した。同年12月には、東京大会準備委員会を実行委員会に改組し、準備運営の強化・拡充をはかっている。東京大会はアジアで初めての大会になるだけに、アジア地域での招致活動を重点に推進し、96年に田中理事長・大会会長、野間佐和子大会副会長(講談社)、永田大会実行委員長らが中国期刊協会を

19——▶Web8 「第31回国際雑誌連合世界大会(1997年FIPP東京大会)プログラム」「第31回国際雑誌連合世界大会(1997年FIPP東京大会)報告書」 日本雑誌協会

訪問、同11月には韓国雑誌協会100周年記念式典に田中理事長、本吉副理事長(婦人画報社)、永田実行委員長がゲストとして出席している。

中国は、東京大会に10名の代表団を派遣し初めて参加、韓国35名、台湾43名、タイ、シンガポール、インドネシア、香港などアジアから約130名が参加したのである。その後、中国は2000年10月にFIPPに正式に加盟することになる。

雑協は東京大会推進本部を1996年末に発足させ、緊急性のある事柄を除き通常の委員会活動を休止し、大会本番へ向け臨戦態勢を敷いた。最終的な協賛・協力会社は、関連団体加盟社などの関係8社をはじめ80の企業・団体に及んだ。

FIPP東京大会以降の世界大会は、99年ハンブルク(ドイツ)、2001年ブラジル・アルゼンチン共催(サンパウロ・リオデジャネイロなど)、03年パリ(フランス)、05年ニューヨーク(アメリカ)で開催され、雑協は毎回、理事長をはじめとする代表団を派遣した。07年5月の世界大会は、北京(中国)で開催され、日本からは58名が参加した²⁰。

◆国際交流の歩み

雑協は1990年(平成2)7月、国際委員会を設置した。FIPPとの関係のほかに、海外の雑誌出版社、関係団体などからの照会、交流が増えてきたことが背景にあった。その後は、国際委員会がFIPP世界大会の参加をはじめとする対応を行っている。国際委員会は2006年(平成18)8月、これまでの役員中心から実務担当委員に委員構成を変更した。

FIPPの東京大会をきっかけに中国期刊協会との交流が活発化し、1999年には同協会の代表団が来日、10日間の滞在期間中に出版社をはじめ流通・書店・印刷・広告会社を視察して、関係者との交流を深めた。翌2000年11月、中国の要請に応じて日本の雑誌広告事情を中心としたセミナーを北京で開催し、成長著しい中国関係者から高い関心を引きつけた。さらに03年2月には、電通が仲介して日中雑誌経営セミナーを北京で開催し、日本から広告主・広告会社を含め60名が参加した。

1962年(昭和37)3月、雑協初の米国雑誌事情調査団(斎藤幸治団長・東洋経済新報社)は日本生産性本部の斡旋により、ニューヨーク、ワシントン、カリフォルニアなどの出版社などを35日間にわたって視察した。その成果は単行本にまとめられて、会員各社をはじめ関係各所に配布された。それから40年後の2002年(平成14)1月には「雑誌愛読月間」特別企画として、販売関係委員によるアメリカ雑誌販売・流通視察研修団(大久保徹也団長・集英社)がニューヨークに1週間滞在し、全米雑誌協会、出版社などを訪問し、定期購読をはじめ販売・流通の現状を中心に、デジタル・ネット時代の雑誌出版社の戦略について調査した。このレポートも小冊子にまとめられている。

1966年(昭和41)7月、ソ連および共産圏の出版事情視察・報告会が行われ、79年2

月には、ソ連邦出版委員会代表団歓迎レセプションが雑協・書協共催で実施された。また、74年6月には、アジアにおける定期刊行物の振興をテーマに、ユネスコ主催の専門会議が経団連会館で開催され、FIPPの事務総長、石川理事長が出席した。

❖2002年ソウルで「FIPPアジア太平洋会議」開催

韓国雑誌協会が初めて来日したのは1980年(昭和55)12月。代表団一行11名は、出版社、取次、広告、印刷会社を視察し、とくに流通業務に大きな関心を寄せた。その後も韓国雑誌協会は折にふれて来日し、意見情報交換を行っている。

とくに、2002年(平成14)4月「FIPPアジア太平洋会議」を韓国・ソウルで開催したことが大きな行事であった。日本からは浅野純次理事長(東洋経済新報社)はじめ広告主を含めて46名が参加し、世界25か国から約150人が出席した。この大会では日本の提案で、個人情報保護法案などメディア規制法案に対し「言論の自由を揺るがす重大な問題」との決議が行われたことは特記すべきことである。05年には韓国雑誌協会から定期的に交流を行いたいとの要望が寄せられたが、具体的な内容などについて協議したうえで検討していくことになっている。

❖イギリス雑誌協会代表団が初めて来日

2005年(平成17)11月、イギリス雑誌協会の代表団10名が初めて来日した。1週間滞在し、イギリス大使館でレセプションを開催したほか、出版社・取次流通センター・書店・広告会社を精力的に視察し、意見・情報交換を行った。その目的は、日本の出版社と提携などを模索する一環として、日本の雑誌事情を調査することだった。イギリスでは雑誌の創刊が年間400誌にのぼり活発で、雑誌の売り上げも販路拡大などで堅調に推移しており、むしろ日本の雑誌業界からイギリスの実情についての質問が目立ったほどである。

A-3 FBF「日本年」の実施

❖日本文化をあますところなく紹介

毎年10月に開催されているフランクフルト・ブックフェア(FBF)は、世界最大のブックフェアである。2006年は全世界70か国以上から、6500社以上の出版社が出展し、来場者は28万人を超えた。日本からも毎年、多くの出展者が参加して、活発な著作権取引を行っている。

このFBFでは、1988年から毎年1か国を招待国として選び、その国の出版のみな



フランクフルト・ブックフェア (FBF)「日本年」展示会場 (1990年9月～11月)。

らず文化全般にまたがる紹介行事を展開している。1990年(平成2)、この招待国として日本が選ばれ、「日本年」の事業を展開した。

全体テーマは、「JAPAN：Then and Now」とし、日本の出版界の歴史のなかでも、海外で行う行事としてはきわめて大規模なものとなり、90年9月から11月までの約3か月間²¹に27の関連催事が行われた²²。その中心はいうまでもなく、ブックフェア開催中の展示であり、法隆寺の百万塔陀羅尼経から電子出版までの日本の出版界の歴史を紹介する「JAPAN：A History in Books」、書協加盟社を中心に各出版社が出展した現代日本を的確に表現する「Japanese Books Today 1990」の展示を中心に、電子出版の最先端技術を紹介するコーナーも設け、連日、大盛況となった。また、会期中には、大江健三郎、中上健次、津島佑子、古井由吉、ミハエル・エンデ、クリストフ・ハイン、アドルフ・ムシュクの各氏が参加した文学シンポジウム「世界の転換期と文学表現—ドイツと日本」、シュミット・前西ドイツ首相が司会を務め、宮沢喜一、堤清二、宮崎勇、坂本義和の各氏が日本から参加したシンポジウム「新しい世界秩序を求めて」、のちに両者ともノーベル賞の榮譽に輝いた大江健三郎氏とギンター・グラス氏の対談、大岡信と谷川俊太郎両氏がドイツの詩人2人と一緒に行った連詩の会など、多彩かつ意義ある催しが展開された(企画委員長=緑川亨氏(岩波書店))。

また、ブックフェア会場外でも、肉筆浮世絵のコレクションとして有名なポーランド・クラクフ国立美術館展をはじめ、日本美術のコレクターとして高名なアメリカのパーク・コレクション名品展、一柳慧企画総監督による雅楽器を用いた日本現代音楽公

演『ミュージック・シーズー伝統と新風』、パルメンガルテン植物園で行われた坂本龍一ソロコンサート、中村歌右衛門が『隅田川』を踊り観衆を魅了した歌舞伎公演、現代日本を代表する演劇として東京グローブ座による寺山修司作『奴婢訓』など、全体テーマ「JAPAN：Then and Now」を表現するにふさわしい企画が実施された。

日本からの出展者数も124社を数え、FBFの招待国としても空前の規模となった。日本の出版社の出展ホールには、出版文化国際交流会²³によって総合案内ブースが設けられた。このブースは現在に至るまで、毎年、交流会によって維持・運営されており、出展者の便宜をはかるとともに、来場者にとって日本の出版界の窓口として重要な役割を果たしている。

実行委員会の総費用としては、約13億8000万円であり、収入の内訳は、出版社・出版関係企業・一般企業などからの指定寄付金10億8000万円、協賛金8800万円、民間芸術活動助成会・国際交流基金・セゾン財団などからの補助金・助成金約9800万円、金利5000万円などであった(財務委員長＝徳間康快氏(徳間書店))。

A-4 その他海外ブックフェアへの参加

◆サロン・ド・リーブル(1997)

フランクフルト・ブックフェアにおける「招待国」イベントの成功により、その他のブックフェアにおいても、同様の催しが行われるようになっていった。

フランスのブックフェアであるサロン・ド・リーブルにおいては、1997年(平成9)に日本が「招待国」となった。これは、日仏両国政府が合意した「フランスにおける日本年」の一環として実施されたもので、3月12日から17日までパリ、ポルト・ド・ベルサイユの見本市会場で実施された。日本からは、書協会員社をはじめ57社から524点、1156冊が出展された。ブックフェア会場中央には、折鶴をイメージしたパーティーションと紅白のカラーコーディネートで飾られた300㎡の「日本館」が設けられ、日本関係図書展示即売・折り紙・書道・紙芝居などの実演が行われた。会場2階には、谷崎潤一郎、三島由紀夫、遠藤周作のそれぞれのホールがつくられ、日本から招待された作

21 —— 会期中の1990年10月3日に東西ドイツは統一を果たした。

22 —— ▶Web10 「フランクフルト日本年事業報告書」(1991年6月) フランクフルト「日本年」実行委員会

23 —— 出版文化国際交流会(渡邊隆男会長)は1953年10月、アジア文化交流出版会の名称のもとに設立され、56年に出版文化国際交流会と改称、61年には社団法人となった。出版物を通じた諸外国との文化交流、相互理解や親善促進を目的としたさまざまな活動を行っているが、とくにフランクフルト・ブックフェアをはじめとする各国の国際ブックフェアへの参加はもっとも重要な活動のひとつであり、外務省や国際交流基金との共同プロジェクトにより、年間十数か国の国際ブックフェアに日本出版界を代表して参加・出展している。

家・評論家・漫画家ら約20名が交代で参加して対談・講演会などが連日開催された。日本の出版界からは、65名の訪仏代表団(団長=渡邊隆男書協理事長)が参加した。

会期前の3月10日には日本から25名、フランスから30名が参加し、「日仏出版人会議」が開催され、両国出版界の現状と問題点などについての議論が行われた。最後に、再販制度の擁護のために両国出版界が協力していくことを謳った共同声明が採択された。

❖TIBF1998「フランス年」行事

1998年(平成10)は、「日本におけるフランス年」の一環として、TIBF1998(実行委員長=渡邊隆男理事長)で「フランス年」行事が行われた²⁴。書協内に設置された「フランス出版文化紹介実行委員会」(実行委員長=石川晴彦・主婦の友社)は、関連団体の協力を仰ぎ、展示・催事の企画・準備を行った。

TIBF1998は、1月22日から25日まで開催され、ブックフェア会場内のフランスパビリオンには日仏の書籍約3500冊が展示され、注文販売も行われて連日大盛況となった。フランス年の開会式は、22日にフランスパビリオンでジャン=ベルナル・ウーヴリユ=仏大使、林田英樹・文化庁長官、浅尾新一郎・国際交流基金理事長を来賓に迎えて行われ、翌23日から、来日したフランス作家の講演会や日本の作家らとの対談会など、企画性に富んだ催事が数多く催された。フランスからは、ジャン=フィリップ・トゥーサン、マリー・ダリュエック、レジヌ・デフォルジュ氏らの著名作家、歴史家として高名なアラン・コルバン氏ら10名が特別招待され、またフランス出版界からは約50名の訪日団が来日した。25日の文学シンポジウム「感性の歴史をめぐって」では、アラン・コルバン、吉増剛造、宮田登の3氏による鼎談が、また「フランスから見た日本文化の現在」では、作家オリヴィエ=ジェルマン・トマ氏、美術史家フランソワーズ・ルヴァイアン氏に、日本から大岡信、高階秀爾両氏が加わり、熱心な議論が行われた。

ブックフェアに先立ち、20日には前年に引き続き「日仏出版人会議」が開催され、アラン・グリュンドIPA会長が「21世紀における出版の役割」についての基調講演を行った。翌日は「出版専門家会議」として石川晴彦実行委員長を議長に、「日仏出版流通の比較と課題」と題し、相賀昌宏副理事長(小学館)から日本型書籍流通の問題点が指摘され、フランス出版協会からはジャン・サルザナ事務局長が、フランスで一度撤廃した再販制度を81年のラング法によって復活させたフランスの実情、再販制を放棄した市場に発生した問題点、ラング法施行後、商品の多様性を保つフランスの出版界の現状について報告した。

招待作家、IPA、APPAの代表者らへの特別プログラムとして、日本出版業界視察

台北国際図書展2002「日本年」の会場。



(取次流通センター・大型書店視察)のほかに、両国国技館での大相撲一月場所観戦に続き、東関部屋、井筒部屋、八角部屋、若松部屋の協力を得て、相撲部屋を訪れて親方を交えてのもてなしという趣向を凝らした企画もあり、海外からの参加者から貴重で印象深い経験との好評を得た。

この年はIPA国際著作権シンポジウム、IPA常任理事会、APPA総会・出版フォーラムが東京で同時に開催されたが、実行委員会を中心とする会員各社の多大な協力を得て、いずれも無事に終了することができた。

❖台北国際図書展(2002)

台北国際図書展(TIBE²⁵)では、1998年以来、特別招待国を定めて特別パビリオンでの出版物展示、作家らを招いてのシンポジウム、講演会などの催事を行っているが、2002年2月開催の第10回図書展の特別招待国に、日本が選ばれた。書協をはじめとする12団体によって、TIBE2002「日本年」実行委員会を組織し、渡邊書協理事長を実行委員長として開催準備にあたった。全体テーマは「書國日本」(Japan, A Country in Love with Books)とし、世界の中の出版大国日本を位置づけるものとなった。

主催者から提供された25ブース(225㎡)の集合ブースに、50ブースの個別ブースを加えた675㎡の「日本館」を会場中央に設け、集合ブースでは人文・社会科学、自然科学、文学、児童、芸術、辞典・学参・語学、趣味・実用、雑誌、コミック、電子出版、台湾からの翻訳書、の11分野に分類した約1400冊の図書が展示された。日本からの出展者数は、個別ブースの26社を加え、総計では175社にのぼった。

関連催事としては、14のシンポジウム・講演会などが会場内の「劇場中心」などで

24 —— ▶Web11 「東京国際ブックフェア'98「フランス年」プログラム」(1998年1月)

25 —— Taipei International Book Exhibitionの略。

行われた。日本からは、作家の曾野綾子、辻原登、児童作家の西巻茅子、漫画家の里中満智子各氏らが参加した。さらに、「90年代の日本の出版界」、「『日本語台湾文献』のデータベース化に関する日台出版協力」、「マンガ、アニメーション制作現場のデモンストレーション」、「蔵書票の東西」、「日本における『ブックスタート』運動の展開」などのシンポジウム・対談会なども行われ、日本の文化と出版物に高い関心をもつ多くの台湾人が参加した。

なかでも「心に残るこの1冊」と題するシンポジウムには、李登輝・前台湾総統、金美齡氏（評論家）、中嶋嶺雄・前東京外国語大学学長、日下公人・東京財団理事長が参加し、750名以上の聴衆が詰めかけ、立ち見が出る盛況だった。このシンポジウムは、すべて日本語で行われ、李氏は日本留学時に読んで感銘を受けたというトーマス・カーライル著、土井晚翠訳の『衣裳哲学』を紹介した。

開会式出席後の陳水扁総統、張俊雄・前行政院長（首相）、李登輝・前総統をはじめ台湾の要人も数多く集合ブースを訪れ、日本の出版物を熱心に視察した。

集合ブースに展示された図書に個別出展者からの寄贈を加えた図書約2300点は、終了後、国立台中図書館に寄贈され、日本統治時代の日本関係の蔵書2万冊を質量ともに高めるものと歓迎された²⁶。

❖ サロン・ド・リーブル・ジュネス(2003)

フランスの児童書専門のブックフェアであるサロン・ド・リーブル・ジュネスでは、2003年のフェアで「日本年」を実施した。同年4月の「東京国際ブックフェア2003」の折に来日した同フェア主催者から、書協および日本児童図書出版協会に対し、同年11月のフェアで日本年行事を行うことが決まっているので協力してほしい、との依頼があった。そこで両協会およびヤングアダルト出版会が、「サロン・ド・リーブル・ジュネス『日本年』実行委員会」を設置し、準備を行った。

会期は03年11月26日から12月1日で、会場はパリ市郊外のモントルイユ市展示ホールであった。日本からの出展図書は40社328点で、これらの図書は会期終了後、パリ市図書館に寄贈された。

会期中には日本から作家・画家が招待され、会場内または市内書店などでワークショップ・対談会・サイン会などが行われた。招待作家は、いわむらかずお、駒形克己、五味太郎、藤野千夜、辻仁成の各氏であった。

このフェアの特徴は、近隣の小中高校の生徒が授業の一環として見学し、作家のワークショップや対談会にクラス単位で参加するというもので、6日間の総来場者約14万人のうち、そのような学生団体枠で1142団体、2万9523人（同伴者：約3400人）が来場した。もうひとつの特徴は、多数の作家・イラストレーターがスタンドでの催事に参加

していることで、実に作家・イラストレーター1090人によるサイン会が各スタンドで開催された。

日本からの招待作家の催しはいずれも大盛況であったが、とくに五味太郎氏と駒形克己氏によるイラスト・クリエイションのワークショップが大人気を博した。また、小・中・高生対象に行われた、いわむらかずお、藤野千夜および辻仁成各氏との対談に来た子供たちが、前もって作品を学校で読み、作家たちへの質問を準備していたため、作家の世界へと誘われる格好の機会となった。

12月1日には、「日本の児童書出版について」(パネリスト=小峰紀雄実行委員長<小峰書店>、吉田ゆりか<日本著作権輸出センター>、コリーヌ・カンタン<フランス著作権事務所>)、「日本の小出版社の立場から」(若月真知子<ブロンズ新社>、小西宏行<スカイフィッシュ・グラフィクス>ほか)、「マンガ探求」(細萱敦<川崎市市民ミュージアム>)をテーマにシンポジウムが開催された。

パリのジュンク堂書店も初出展し、日本関係図書の販売を行って7日間の会期中に約4万ユーロ(約500万円)の売り上げを達成した²⁷。

B | アジアの出版界

B-1 アジア出版界との協力

❖ ユネスコとの共同支援

1966年(昭和41)5月、ユネスコの主催による東京で開催された「アジア地域における書籍出版・配給に関する専門家会議」の結論にもとづき、69年3月29日、東京に「財団法人ユネスコ東京出版センター(TBDC²⁸)」が設置された。その準備として、アジア地域出版技術研修コースが67、68年の2年間、各2か月にわたり東京で行われた。第1回研修コースは10月25日から12月21日まで東京・青山のアジア会館を中心に実施された。

TBDCは書協が中心となり、ユネスコ国内委員会と緊密な連絡を取り合い設立準備が行われた。同センターのおもな事業は、①アジア地域の出版に関する調査研

26 —— ▶Web12 「TIBE2002『日本年』実施報告書」(2002年6月) 同実行委員会

27 —— ▶Web13 「サロン・ド・リール・ジュネス『日本年』実施報告書」(2004年3月) 同実行委員会

28 —— Tokyo Book Development Centreの略。